



梅原龍三郎《薔薇図》1953  
東京国立近代美術館蔵

## 『梅原龍三郎 花と名峰 展 に向けて』

砺波市美術館学芸員 末永忠宏

砺波市美術館の開館15周年記念展として、梅原龍三郎展を開催することとなりました。

梅原龍三郎は、1888年に京都に生まれ、1986年に東京でなくなった洋画家です。じつに97歳と10か月を生きた画家でした。15歳で浅井忠に師事し、聖護院洋画研究所、関西美術院で洋画を学びます。1908年に田中喜作とともに渡仏し、翌年に印象派の巨匠・ルノワールのもとを訪れ、直接指導を受けています。そして、留学中に知り合った有島生馬を通じて、文芸雑誌『白樺』へ、ルノワールやパリの芸術についての小論を寄稿しました。ヨーロッパでの5年の滞在を経て1913年に帰国、白樺主催の個展を東京で開いて、衝撃的な画壇デビューを飾ります。以後、二科会、春陽会、国画会に参加するなど画壇で活発に活動。1944年から東京美術学校の教授を務めました。同

校教授退任後の1952年、日本が初めて参加したヴェネツィア・ビエンナーレで国際審査員となりました。また同年、文化勲章を受章しています。戦前からの帝国美術院会員（戦後は日本芸術院会員、1957年まで）でもありました。そういった肩書よりも安井曾太郎と名声を分けた大画家といったほうが良いかも知れません。

それほどの大画家の展示が砺波で開催できることは、誠に喜ばしいことです。どうして展覧会を開くことになったのか。その理由は2010年春に当館で開催した「濱田庄司の陶芸」展に遡ります。同展は2008年から川崎市市民ミュージアム、茨城県陶芸美術館、当館を巡回し、のべ7万3千人の観覧者がありました。当館は最終会場ということであり、作品返却を担当しました。返却先は関東エリア。関東方面には不案内ゆえ、企画者である川崎市市民ミュージアムの佐藤美子さんに随行してもらいながら行いました。おかげで作業はスムーズに進んだのですが、私は所蔵者に初めてお目にかかる機会であり、いささか緊張していました。それは持ち主が濱田庄司のお孫さんの濱田友緒さんや、川端龍子のお孫さん、文芸評論家奥野健男の奥様といった錚々たる方々だったからです。

濱田展の観覧券には「柿釉抜絵青差角瓶」（1939年作）という作品を使わせていただいたのでした。この作品については、梅原龍三郎旧蔵という知識のみ得ていた私は、その時になってはじめて作品返却先が、梅原家であるということが分かりました。返却先リストには苗字は梅原ではなく嶋田とあったので、他の持主のお宅へ伺うものとすっかり思い込んでいたのです。対応されたのは梅原の曾孫にあたる嶋田華子さん。まず我々は豪華な装飾家具と壁一面に大小さまざまな見事な油彩画が掛けられた赤色の応接室に案内されたのでした。そこで嶋田さんみずから検品してもらい、無事、傷みもなく返却できたことを見届けた後、ねぎらいの言葉とともに、お茶を頂きました。

佐藤さんと嶋田さんがお互いの近況報告で盛り上がった（当然ながら二人は面識があるので）後で、「2013年は梅原が画壇デビューからちょうど100年になります。梅原の展覧会にご興味はありますか」という嶋田さんの申し出があり、出張後、上司らに相談。そこで「再来年は美術館の開館15周年だし、周年展プラス、フェア特別展でさせてもらおう」と決まって、展覧会が実現化へと動き出したのでした。それが全てだったとは言いきりませんが、チケットに図版を使ったことが、きっかけだったのかもしれない。